

高麗均如の五教章注釈について

中 條 道 昭

均如（九二三—九七三）が『五教章』を注釈するに際して示した彼の『華嚴經』観は、漸頓円三種判では頓円、小始終頓円五教判では円教の撰とするのが基本的立場といえよう。斯る態度が同別判を論ずるのに『法華經』をあくまで別教一乗に及ばない同教一乗の教えを説く經典と位置づけざる論議になって表われている。別教一乗即ち『華嚴經』の根本経旨が華嚴一乘頓円一乗の語によっても表現されているが、中で頓円一乗とは均如によって捉えられた『華嚴經』の経趣を余すところなく証明する語に違いない。文献的には『華嚴經伝記』にもみられるが『搜玄記』で慧光の説が引用され漸頓円三種判を列した後に「此経即頓及円二教撰」とあるのに直接はもとずくのであろう。また、漸頓円二教に修相漸・實際頓・窮実円の名を与えて三教のもつ内容と意味の規準を定めている。この三教と先に『華嚴經』を頓円二教の撰とする解釈とは均如にあつてどのような理解の基に生まれたのか考察したい。

均如がこの漸頓円三教を論じて独自の見解を表明するのは、『五教章』第三古今立教の第三に慧光の三種教を解釈する段においてである。そしてこの三教解釈は『搜玄記』卷一上の玄談部分を巡つて行われるが、彼の述べるところによれば『搜玄記』卷一上のこの玄談部分は漸頓円三教を説く為に三門に分けられる。この三門に分け

るのは彼による創出ではなくその高麗時代において既に定まつた解釈法であつたとみられるのである。その分門は一化門・相成門・了義門と名づけられ、『搜玄記』卷一上の五門分別中、第二明藏撰分齊の段が一化門、第五分（隨）門解釈の別釈文分齊の段について二つに分け、三教相に約す段を相成門、其次第を明す段が了義門とされる。三門の名はそれぞれの段にみられる『搜玄記』本文からその一段を要約してつけられる。一化門は「一化始終教門有三。一曰、漸教。二曰、頓教。三曰、円教。」（正蔵三五・一三下）、相成門は「約三教相成者、：以之為頓。：稱為漸。：故曰為円。」（同・一五中下）、了義門は「其次第者、就於一乘了義実説、約対治方便行門差殊、要約有三。以明次第。」（同・一五下）の文にもとづくであらう。了義門で説かれる三教が修相漸・實際頓・窮実円と名づけられるが、漸頓円三教に対する均如の其本的な概念規定としてよいであらう。この考え方をもとにそれぞれ一化門・相成門・次第門三門の三教と『華嚴經』がどのような関係にあるかを問答を設けて自説を述べている。『華嚴經』を頓円二教撰とする基本姿勢によりながら問を起すことによつて種々の展開がみられる。まず、三門で説く三教は如何なる関係にあるかを、

今 積、三門三教一而無殊。謂古辞、一化門中、列名。相成門中、
 积相。了義門中、示次第非一之義及義無碍也。是故、三門三教、
 体或是一。（均如大師華嚴学全書）下卷八九頁）

と述べ、三門で説かれる三教は各門の設けられた目的によつて論じられていたのであり、三教の各々が分門されても意味が異なるのではないとする。この自説を出すまでには一化門中にみられる「初門漸内所詮三」と述べられ漸教の内に修多羅・毘那耶・阿毘達摩の

三藏があり、『華嚴經』はそのうち修多羅藏に属すから漸教ではないかという異説に対し、議論上細かい配慮を施しながら否定している。それを次にみてみよう。

既云、初門漸内所詮三故教則爲三、乃至、此經則修多羅藏撰、是故漸教通一化也。實際頓中、立普賢二十二位及十七位、故從六道因果至円教五位。皆是普賢之位。是故頓教通一化也。窮実円者、是第十根所領、彼文云、見上諸教並は無尽性海。隨縁所成、更無異事。是故諸教即是円明無果海等上。是故円教亦通一化。

といい、『華嚴經』は修多羅藏の撰である点において漸教も一化に通ずる。普賢位に二十二位を立てる点で頓教も一化に通ずる。円教は義理そのまま一化に通ずるのである。この議論は『華嚴經』と漸教の關係について次のような側面を見いだす。

問、此經中、約何義爲漸耶。答、此經門相漸次之義、是漸教也。といい、均如はこの問答を正義とはしないが、『華嚴經』における「門相漸次」という、階梯を踏んで菩薩が悟入する経旨を指すと思われる、經典の説相について言及している。単に頓円の撰とのみ言い切るのでは決してこのような解釈は不要なはずである。問者は『華嚴經』に門相漸次の義があるなら漸教であるべきでどうして違うのかとの問を提出するが、門相漸次とは頓中においてたてられるとする。慧光の師といわれる仏陀三藏が五法界、六周因果をたてたが、智儼は五法界によって理実法界中に十普法を立て六周因果によって因果縁起中に五周因果を立てた。この義が門相漸次であり頓教中の義だとするのである。さらに、

此經門相是頓之前後、对彼下教、還於頓中見也、如下教中、亦有解行頓成、理性頓現之頓教、若对花嚴則合爲漸教、今此亦尔。

高麗均如の五教章注釈について（中 條）

という。頓円二教撰とする頓教は先の門相漸次がその中であるといわれるように円教と一体である。故に下教の中にさらに頓教があるというこの論が生じてくる。五教の頓教とは異なる性質として漸頓円三教の頓教を捉えることは次の議論の成立に極めて有力な論拠を与える。『華嚴經』八会について漸頓円三教に配釈するのである。義湘の弟子表訓が相成門の三教を八会に配した説に例をとり、

若依此義、於初会中、立實際門三教則普莊嚴童子自勝進行中具五位、故是漸。隨一一位、成仏果、故是也。寄於円教、現無尽者、是円也。次五会中、立修相門三教、則五位之因是漸也。五位之終皆成仏者、是頓也。円教如前。後二会中、立窮実門三教、則且第八会善財益中、具五位者、是漸也。頓円如前。

と述べる。表訓が相成門の三教について為した説を了義門において試みている点に、これが均如自身の容認し得るいや、むしろ積極的な解釈であると思われる。この説が『華嚴經』に門相漸次の義を認めることによって成立するのであるのはいうまでもない。更に、『探玄記』巻一に「差別因果是方便修相对治因果」とある文、『捜玄記』巻四上仏不思議法品の来意に「由因行満已次行成得果耳」とある文について漸頓円の配釈できる例として掲げ、經典の例として普賢行品、性起品の説相を挙げる。均如は漸頓円三種教に対して、「修相之名但從漸得、實際從頓、窮実從円而得名」と述べるのが根本である。修相・實際・窮実の中の三教もその規準に従う。この了義門は次第して非一の了義を現わしているのであり漸の中に漸頓円、乃至円に漸頓円の義を認め、一化・相成の二門に対して多様の解釈を可能にさせているのである。（駒沢大学大学院）